

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十一回「鵬程万里」 中川由香

訃報の伝える功績と評価 骨折りを重ねた国の土台

人物は訃報においてその功績や世間の評価が総括されます。圭介は明治四十四年六月十五日、食道癌のため国府津で世を去り、酒匂で荼毘に附されました。様々な新聞が訃報を報じ、葬式の様子と共に圭介の事跡が振り返られました。

六月二十日、青山齋場で葬儀が行われました。当時ウラジオストクの総領事だった長男富士太郎が喪主を勤め、麻生三連隊歩兵一大隊と儀仗兵が棺を守りました。徳川慶喜公、徳川家達公、寺内寿一陸軍大臣、後藤新平通信省大臣、渋沢栄一男爵などが弔問・参列し、箱館戦争同窓会である碧血会、虎ノ門会、工学会等圭介が生前関連した各種団体が生花を寄贈しました。また小柳津要人（箱館戦争で遊撃隊、後丸善社長）や榎本武揚の息子武憲ら知己をはじめ、貴顕紳士や親族約二千名が参列し、生前の故人を偲びました。

多くの新聞は「徳川家のために朝廷に抗って戦い逆臣の汚名を蒙った、

維新の風雲児」「日本魂の誇りとする武士道の好型たる「英雄」と、戊辰戦争での行動を称えました。天声人語も「薩長の官軍に抗して奥州から北海道に奮戦したのは、歴史上に隠れられない勇ましい事跡。小男の大鳥は全身これ膽」との評判を伝えます。対して、東京毎日新聞で安藤太郎は「大鳥氏は一度として自ら兵を指揮して戦に勝つたことなく負け通しだったが、不思議に負けるとニコニコして帰ってくる。常人は負けると真つ赤になって言い訳するが大鳥氏は少しもそれがなく、終りまで陸軍の大将を勤めた、偉大な人格だった」と伝えました。この「二度も勝つたことは無い」というのは、自身を敗軍の将とした圭介の謙遜であり、実際の圭介は、戊辰戦争の小山や藤原木古内、箱館戦争七重浜の戦い等で、幾多の戦闘を指揮し、確かに勝利して新政府に恐れられています。圭介が戦下手であるという誤った認識は、安藤のこの発言に帰する面があり

ます。訃報は、人物の後世の印象を決めてしまうといえます。他方で安藤は「ぜひ世に伝えるべきことは、大蔵省から欧米に派遣された際、専ら工業の研究に従事し、帰国後以来大いにわが国の工業界に貢献した事だ。工業界の今日の隆盛は確かに大鳥氏に負う所が多い」としています。現在の大鳥の人物評で、戦に負けたことばかりが引用され、肝心のこの言がほとんど参照されていないのは、釈然としません。他の新聞は「大鳥男爵の名は世間に高く、児童や使い走りに到るまでその名を記憶しない者はいない。幕末の勇将並びに朝鮮駐劄公使として最もその名を知られたが、科学の造詣すこぶる深く、明治の後も常に学問の為に力を尽くし、学士会員に推薦され、有数の学者だった。歴史上の一人物として永く後世に伝えるべき人」とし、工業と社会発展に尽くした科学者としての形跡を多く伝えます。「晩年は枢密院で喧々諤々の議論、常に政府者をして二敵国の感を抱かせた」と、老いてなお国を改善する議論に妥協がなかった様子を記します。

また、産業雑誌である「実業世界」は「男爵は旧幕府の遺臣として明治政府に重用された巨人。胆勇あり智見ある人格。今や国家の前途に大鳥氏を待つべきこと多々ある時に。哀しむべし」と悲報を報じました。その著者の前田は、圭介死去の二年前に国府津の瀧の家を訪問していました。「新聞雑誌の経営は、百難を排し赤貧に甘んじ、世の指導たる重任がある。虚栄、虚心なくまじめに専心一意、奮闘努力しなさい」と圭介に諭されたことを偲び、記者の重責を強く認識します。まさに現在の新聞各社に旨としていただきたい言葉です。前田は「頑丈な短軀、美しい白髭は青山一片の土となった。幾百万繰り返し哀悼しても再びその声に接することができないとは」と、圭介の死を嘆きました。

圭介の絶筆は国府津村民に請われて神社に納額した「恩及樵漁」です。皇太子殿下より見舞品を下賜された際の筆でしたが「恩が木こりや猟師にも及ぶ」という言葉は、圭介自身の世の中への感謝のようにも思えます。最期の言葉は「苦しくはないが骨が折れる」でした。その言葉は、身を削り骨折りを重ねる国の土台を創り続けた人生を象徴しました。新聞は顕著にその功績を伝えました。

まちの話題

トピックス

暮らしの案内

お知らせ

スポーツニュース

鵬程万里

情報ステーション

相談窓口・新着図書情報表

町長コラム